



桑田立齋アイヌ種痘之碑

裏面には立齋自筆で『活気満大虚、丹心照千古。桑田立齋』と刻んだ。この詩句は立齋曾孫賀来明子氏所蔵の立齋の遺言書から、署名は相馬の半井宏人氏所蔵の立齋書状などから採った。表面の字は二宮が書いた。側面にはこの建碑の実現に努力された標津・ポー川史跡自然公園・歴史民俗資料館の梶田光明氏、深川の網代旭氏、そして碑を制作された小樽の山本照男氏らの名を刻んだ。除幕その他の行事は平成十一年の標津町一二〇周年記念の折りに行われるはずである。

標津町の協力によって碑が建立された「望ヶ丘森林公園」は中標津空港から町に入り海に達する直前の左にある小高い丘で、碑からは立齋巡回の最東端である国後島が見える。この海を一四二年前の九月十一日の嵐の中、立齋は野付半島に渡ってきた。根室、標津一帯で立齋は安政四年に一〇三人のアイヌに種痘をしたが、その三七パーセントが標津のアイヌであった。門人の井上元長が越冬して追加巡回し、結局安政六年

初頭までにこの地のアイヌの八五パーセントに種痘をした。

この驚嘆すべき蝦夷地巡回種痘の壮挙の詳細を含めて桑田立齋の生涯と功業は、初めて発見された立齋の書状や十二人の門人の事跡とともに『桑田立齋先生』(二宮陸雄著、三八四ページ)、顕彰用に十二月制作、『桑田立齋安政四年蝦夷地種痘』(二宮陸雄、秋葉實共著、標津町に寄付し残部なし)に発表した。前者は平成十年十二月に刊行(非売品)したが、研究者用に若干の部数を残すので、希望の方は二宮宛に申し込またい。

桑田立齋先生顕彰会(二宮陸雄、網代旭、秋葉實、賀来明子、山本照男、半井宏人、梶田光明、田中美子、日吉恵子)

(二宮 陸雄)

### 関 寛齋の開拓精神に学ぶ

#### 「寛齋セミナー」開かれる

北海道足寄郡陸別町では開町八十周年を記念して、平成十年十月十五、十六日の両日、陸別町開拓に晩年をささげた医師・関寛齋翁の精神を顕彰し、先駆者としてのチャレンジ精神を学び、寛齋の進取・慈愛の人生を多くの現代人に「生きる指針」として吸収してもらおうという目的の下に、町をあげての「寛齋セミナー」が開催された。

第一日(十五日)

○命日祭・青龍山・寛齋遺跡見学

○講演

「花さく郷に生きた関 寛齋」

講師 大西 泰久氏

○シンポジウム  
「関 寛斎の開拓精神」

青年期・銚子市 戸石 四郎氏

徳島時代・徳島市 泉 康弘氏

高齢期・札幌市 本多 貢氏

○語り『みづのたわごと』

ほうき座 窪田 稔氏

○交流会・寛斎さんをしのんで

第二日(十六日)

歴史ウォーク・芦花と寛翁の語り歩いた道・ニケウル

バクシユナイ

見学会(関 寛斎資料館)

特別展示・司馬遼太郎in陸別

関 餘作資料展・ロシヤでの医療活動

第一日のシンポジウムは二百名を越す参加者で非常に盛会であり、各講師の方々のお人柄がそのままに反映した良い発表で、顕彰会の斎藤省三氏をはじめとする町の人々の運営も見事であった。シンポの和やかな雰囲気は、夜の交流会にそのまま持ちこまれた。心から寛斎に魅かれている多くの人々との、酒を酌み交しながらの意見の交換は、平生文献史料にのみ目を向けがちな筆者にとって得難い体験であり、貴重な刺激剤になった。



写真左から本多 貢、泉 康弘、戸石 四郎 各氏

三千ヘクタールと伝えられる旧関牧場の跡を歩きつつ眺めた大平原は、天も地も美しく豊かで雄大であり、寛斎の志を垣間見る思いがした。この町の人々の、寛斎を父の如く慕い「父を大切にすることは子として当然のこと」という健康な精神が、陸別町関寛翁顕彰会主催によるこのセミナーを成功に導く原動力となつたことはまちがいない。

(芝木 秀哉)

### ウイリアム・ウイリス文書(マイクロフィルム)の里帰り

ウイリス文書(原文書)は萩原延寿氏から鹿児島県歴史資料センター黎明館へ寄贈され、複製が横浜開港資料館と順天堂大学医学部研究室に好意により寄贈された。萩原延寿氏がすでに『遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄』(朝日新聞夕刊に連載されたものも含む)で詳細な研究を発表されているので、ご存知の方も多いと思う。

総数約六四〇点(但しマイクロフィルム六本)にのぼるウイリス文書は、約二〇年前にイギリスのフランシス・アームスト